

第一次世界大戦下の英国文化外交と日本サッカーの黎明：1919 年 FA シルバークップ寄贈の再評価

深町 悟 (フカマチ サトル)

神戸大学大学院国際文化学研究科

fukamachi@port.kobe-u.ac.jp

2025 年 5 月 11 日

要旨

日本サッカー協会（JFA）は、1919 年に英国フットボール・アソシエーション（FA）から銀杯が寄贈されたことを契機に、1921 年に大日本蹴球協会として設立された。このトロフィーは、後に天皇杯へと発展する全国トーナメントの礎となったものである。従来、この寄贈はウィリアム・ヘーグ個人の尽力によるとされてきたが、本研究は、歴史的記録に基づき、この出来事が戦時下日本における英国のプロパガンダ戦略と深く結びついていたことを論証する。JFA の機関誌『會報』（1922 年）における内野台嶺の証言は、長らくこの寄贈に関する主要な典拠とされてきたが、彼自身が過程に直接関与していなかった点から、その記述の包括性には検討の余地があると言える。そこで本稿では、英国外務省および情報省の電報、FA 会長書簡、ヘーグ自身の覚書など、近年発見された一次資料の分析を通じて、寄贈の背景に横たわる広範な地政学的文脈の解明を試みる。そして、これらの資料からは、ヘーグ、駐日英国大使グリーンおよび英国情報省のパーレット、さらには日本の教育者である永井道明といった主要人物が、寄贈実現において果たした複合的な役割が浮かび上がってくる。本研究が到達した結論として、まず銀杯寄贈はサッカーを通じた英国の対日文化戦略の産物であった点が挙げられる。加えて、ヘーグの主導的役割のみならず、永井道明もまた銀杯寄贈の着想と受領において重要な役割を担っていた事実が明らかとなった。FA による迅速なトロフィー準備と英国政府によるサッカーの戦略的活用は、当時における日英関係の形成にも影響を及ぼしたと考えられる。元来は戦時プロパガンダの一環であったこの銀杯寄贈だが、その当初の目的を遥かに超え、日本サッカーの発展に寄与するとともに、日英間の文化的紐帯を強化する結果をもたらした。その後の日英同盟の解消や第二次世界大戦中の銀杯喪失という歴史的変遷を経てもなお、JFA およびその全国トーナメントは発展を続け、日本における英国の文化的影響を示す事例の一つとして、この寄贈はその歴史的意義を今日に伝えている。

キーワード： 日本サッカー協会（JFA）、銀杯寄贈（1919 年）、対日英国プロパガンダ、ウィリアム・ヘーグと永井道明、日英サッカー関係

はじめに

大日本蹴球協会（今日の日本サッカー協会、以下 JFA と記す）は第一次世界大戦後の 1921 年に設立された。その設立の直接的な契機となったのは、1919 年における英国フ

ットボール・アソシエーション（以下 FA と記す）による銀杯の寄贈である。1921 年からは、このトロフィーを懸けた全国大会が組織され、後に天皇杯と呼ばれるようになった。毎年 80 を超えるクラブが参加するこの大会は、日本で最も権威あるサッカートーナメントの一つへと発展を遂げ、現在に至る。JFA は 2021 年に創立 100 周年を迎え、それに先立つ 2011 年には、FA からオリジナルの銀杯のレプリカが贈呈されたことも特筆される。最初の銀杯寄贈を推進し、JFA 設立に極めて重要な役割を果たしたウィリアム・ヘーグ（William Haigh）は、その功績により 2008 年に JFA 殿堂入りを果たした。

この銀杯寄贈に関して最も広く参照されてきた記述は、東京高等師範学校蹴球部の指導者であり、JFA 設立にも貢献した日本サッカー史の重要人物、内野台嶺（1884 年～1953 年）によるものである。JFA の機関誌『會報』（1922）創刊号において、内野は FA からの予期せぬ贈り物に驚きを表し、トロフィー獲得の成功をヘーグの尽力に帰した（内野 1922, 3-5）。この内野による説明は、その後、長らく JFA 設立を語る支配的な通説となり、『日本サッカーのあゆみ』（JFA 1974）、『天皇杯 65 年史』（1987）、『日本サッカー史：協会創立 70 周年記念』（JFA 1991）、『日本サッカー史：日本代表選手 90 年の軌跡』（2002）、『日本サッカー協会 100 年史』（2023）といった数多の歴史関連出版物で繰り返し言及されてきた。

しかしながら、内野自身は寄贈の交渉過程に直接関与していなかったため、その記述の歴史資料としての包括性には限界が見られる。『會報』（1922 年）で彼は、寄贈の第一報に接した経緯を「大正八年三月十二日、東京朝日新聞紙上に突然、英国フットボール・アソシエーションから我国協会に銀杯を寄贈した旨の記事が現れた……我々は皆非常に驚いた」（内野 1922, 3）と詳述している。この記述は、内野が報道を通じて初めてこの事実を知ったことを裏付け、彼が積極的な関与者ではなく、むしろ観察者の立場にあったことを物語っている。加えて、その回想からは、銀杯確保に向けて彼が直接的または間接的に何らかの役割を果たしたことを裏付ける実質的な証拠は見出せない。

銀杯の寄贈が JFA 史における画期的な出来事であったことは論を俟たない。JFA の各種記念出版物においても一貫してその重要性が強調されてきた。しかし、その歴史的重要性にもかかわらず、寄贈をめぐる従来の理解は、日本国内で利用可能な史料が乏しかったこともあり、多分に推測に依存し、不正確な点を含むものであった。こうした状況に対し、今回発見された英国外務省および情報省の公文書[1]、FA 会長書簡、そしてウィリアム・ヘーグ自身の覚書といったアーカイブ資料群は、この歴史的転換点となった出来事に新たな光を当てるものである。これらの資料は、銀杯寄贈が第一次世界大戦という広範な地政学的力学と強く結びついていたことを示唆している。

本研究は、これらの新出史料を詳細に分析することを通じて、銀杯寄贈をめぐる歴史的経緯を再評価することを目的とする。本稿の構成は以下の通りである。まず第 1 節で、銀杯に関する従来の説を批判的に検討し、以降の分析の基礎を提示する。続く第 2 節では、第一次世界大戦下、特に寄贈の機運が高まった 1918 年頃の駐日英国大使館、英国外務省、および情報省の対日政策と活動を検証する。第 3 節および第 4 節では、かかる歴史的文脈において銀杯贈呈計画がどのように策定され、実行に移されたのか、その具体的なプロセスを明らかにする。そして最後に第 5 節において、日本における銀杯の受容状況を検証し、実際の寄贈プロセスと従来の説とを比較検討することで、両者の間に見られる主要な齟齬を指摘し、新たな歴史解釈を提示する。

1. 日本における従来の説

銀杯寄贈の歴史的経緯を分析するにあたり、まず日本国内で広く受容されてきた従来の説について概観しておく必要がある。この出来事に関する最も初期の包括的な記述は、1922年に発表された内野台嶺の回想に見出される。彼の記述は詳細にわたるため、銀杯寄贈に直接関連する主要な箇所を以下に4点抜粋する。

1. 大正八年三月十二日の東京朝日新聞紙上に、突如として英國蹴球協會から我が蹴球協會へシルバーカップを寄贈した記事が出た。・・・自分等はビックリした。
2. 越江て三月二十日、時の東京高等師範學校長嘉納治五郎先生から、早速出頭せよとの書面に接した。之にも赤ビックリした。・・・先生から申渡された事柄はかうだ。「此の度英國大使を通して、英國の蹴球協會から我が蹴球協會へシルバーカップを寄贈して来たが、日本には木だそのような協が無いから、是非此の際それを設立せよ。」
3. これより前大正七年春二月、關東にも關西にも第一回蹴球大會が催された。殊に關東大會には時の英國大使グリーン氏が來場された。それらの關係から日本の蹴球の様子が英國に傳はり、其の結果此のシルバーカップの寄贈といふ段取になったらしい。
4. 兎も角も蹴球協會の設立されるまでといふ條件で、當時大日本体育協會の會長をして居られた嘉納先生が、其のシルバーカップを受取るといふことになり、三月廿八日に英國大使館で其の譲り渡しを済した。其の時英國大使は「之に因って日本の運動が一層隆になるやう、そして又日英兩國の國際關係も親密になるやう」との希望を述べられた。（内野 1922, 3-4）。

興味深いことに、この内野による説明は、後年さらに詳細が付加されたり、一部修正が加えられたりするなど、ある種の変容を遂げている。例えば、1924年の内野自身の記述（内野 1924 頃、竹内 1991 に収録 [以下、内野 1924]）[2]では、先の回想とは一部異なる内容が提示されており、3月20日に嘉納が内野に対し「英國蹴球協會から英國大使を通じて銀杯を自分の手許まで贈ってきた」と語った、と引用されている（内野 1924, 221）。これは、嘉納が銀杯受領のために英國大使館へ直接赴かなかった可能性を示唆するものである。しかし、これら二つの記述は、必ずしも相互に矛盾するとは断定できない。内野（1922）は、「嘉納先生が、其のシルバーカップを受取るといふことになり、三月廿八日に英國大使館で其の譲り渡しを済した」（内野 1922, 4）と述べているが、厳密には、彼が嘉納による銀杯の直接受領を明言しているわけではない。この文脈における「受け取るといふことになり」との表現は、実際の行動ではなく、あくまで予定を述べているに過ぎないとも解釈できる。さらに、「其の譲り渡しを済した」という言葉遣い自体も、その行事に関与した具体的な人物構成を曖昧なものとしている。

JFA の公式見解では、嘉納が大使館で直接銀杯を受け取ったとされている（JFA 1974, 12-13、JFA 1996, 34-35、および JFA 2023,41）。同様に、竹内（1991）も、嘉納がこの目的のために個人的に大使館へ赴いたと記述している（竹内 1991, 221）。しかしながら、JFA（1974）の別頁には、内野が嘉納に同行して英国大使館で銀杯を受け取ったとの記述も見られる（JFA 1974, 47）。後藤健生による著作においても記述の不一致が存在し、後藤（2002）では嘉納が唯一の受領者とされている（後藤 2002, 24）一方、後藤（2007）では内野が受領の場に居合わせたかのような記述が現れ、「嘉納と内野がカップを受け取ることになる」と述べられている（後藤 2007, 35）。

贈呈式後の銀杯の所在についても、一定の不確かさが存在したようである。内野（1922）は、日本体育協会会長という嘉納の役職を明示することで、この協会が銀杯を管理したことを示唆するにとどまっているが、その 2 年後には、「一時大日本体育協会に保管しておいてもらい」と、より断定的な表現で主張している（内野 1924, 217）。これは、嘉納が銀杯を受領したという情報を前提とした内野の推測に基づく結論と言える。同様に、JFA（1974）も、JFA 設立まで嘉納が銀杯を保持していたと記述している（JFA 1974, 13 および 47）。しかし、これらの主張は、本稿第 5 節で詳述する英国側史料の記述と矛盾する。この出来事に関する日本側の記述は、外部史料との照合や十分な検証を経ないまま、広く受容されてきた傾向がある。

英国が銀杯寄贈を決定した理由に関する伝統的な説明にもまた、後年になって脚色が付加されてきた側面がある。2016 年に開催された東京高等師範学校蹴球部創立 120 周年記念シンポジウムでは、1918 年の関東蹴球大会に英国大使グリーンが出席し、その際に日本で全国規模のサッカー選手権が開催されていると誤解した、との説が言及された。そして、この誤った情報が英国本国に伝達された結果、FA による銀杯寄贈が実現したというのである（中塚 2016, 28）。この逸話は、JFA（1974）の記述に依拠している可能性が高い。同書には次のように記されている。

1918（大正 7）年には、東京・名古屋・豊中の 3 ヶ所でそれぞれ別個の大会をやるようになった・・・それが、新聞の報道上の誤りもあって、ロンドンへは全日本の選手権大会が行われたと伝わり・・・大銀杯が寄贈されてきた。（JFA 1974, 12-13）。

同書の別箇所では、さらに次のように詳述される。

外国から来ている通信社の特派員の目には、全日本選手権の地方予選がときを同じくして行われたと映ったようである。しかもそれが・・・誤った報道となってロンドンに伝わったのである・・・”The Football Association”は非常に喜んで・・・大銀杯を贈ってくれた。（JFA 1974, 46-47）。

新田純興（1987）および JFA（1996）におけるその引用は、この説をさらに敷衍し、「外国通信社の誤りにより……その出来事のニュースが 1918 年にロンドンに届き、年末までにカップを日本に送る計画が合意された」と述べている（新田 1987, 42; JFA 1996, 35）。かくして、銀杯の寄贈は、不正確な報道に基づく英国側の誤解に起因するものであった、というのが長らく通説となっていた。

この「誤解」説の起源は、内野（1922）の記述に遡る可能性も考えられるが、JFA（1974）、新田（1987）、あるいは JFA（1996）といった文献は、「外国人特派員」や「外国通信社」といった情報源に関する具体的な根拠を明確に示していない。この説話は、多分に口承によって継承され、時間とともに変容していった可能性が推察される。

近年では、後藤健生（2023）が『日本サッカー協会 100 年史』において、1919 年 1 月 3 日付の『タイムズ』紙記事を引用し、この長年の通説に修正を試みている。後藤によれば、銀杯は英国外務省の要請に基づき FA から寄贈されたものであり、これは駐日英国大使館、具体的にはウィリアム・ヘーグが寄贈プロセスにおいて中心的な役割を担ったことを示唆するという（後藤 2023, 46–47）。しかしながら、後藤の議論は主として英国側の一新聞記事に依拠しており、他の裏付けとなる史料を欠いているため、その結論は依然として推測の域を出ず、英国外交当局の直接的関与を断定するには至っていない。

2. 第一次世界大戦中の英国と日本

第一次世界大戦の前半期、英国政府は日本をプロパガンダ活動の優先的対象国とは位置づけていなかった。しかし戦争が長期化するにつれ、国内に多数の親独派を擁する日本に対し英国は強い警戒感を抱くようになり、両国関係は「我々の同盟国の中で最も信用ならない国」(The most shaky of our Allies)とまで英国側から評されるに至る (Gowers to Montgomery, 8 Feb 1917)。インド独立運動に対する日本の姿勢もまた、英国の対日不信感を増幅させる一因であった。特に 1916 年頃から日本国内で拡大した反英キャンペーンは、日本の世論を英国政府がもはや看過できない深刻な水準にまで悪化させる結果を招き[4]、この時点に至って英国は従来の方針を転換し、日本における積極的かつ組織的なプロパガンダ活動に着手するのである。

1918 年になると、日本における 2 年以上にわたるプロパガンダ活動の後、英国側ではこれらの取り組みが所期の成果を上げていない原因について、本格的な評価が開始された。外務省宛ての書簡で、大使館の一等書記官であるチャールズ・ウィングフィールド (Charles Wingfield) は、米国留学経験を持つ日本人が日本の実業界で指導的地位を占める事例が多く、結果として米国に多大な経済的利益をもたらしている状況を指摘し、「日本で見出される英国および英国のあらゆるものの最良の友人は、我が国で学んだ日本人である」(“The best friends of Great Britain and of everything British to be found in Japan are the Japanese who have studied in our country”)と力説している (Wingfield to Gaselee, 19 July 1918)。駐日英国大使であるカニンガム・グリーン (Conyngham Greene) もこの見解を共有しており、1918 年 4 月からは、多数の若き日本人を教育するための英国式学校を日本国内に設立するという提案に至った。しかし、この構想は間もなく財政的な困難に直面せざるを得なかった。情報省、外務省いずれの予算を用いるにせよ、プロパガンダ関連資金は、「戦争に直接関連し、戦争から直接生じる」(“connected with and arising immediately out of the war”) 支出でなければならないという財務省の厳格な基準を満たす必要があったからである。その結果、教育のような長期的な投資を要するプロジェクトは実行可能な選択肢ではないことが明確となり、この制約は、学校設立の可能性を閉ざしたのみならず、日本人学生の英国留学を支援する奨学金制度創設の見込みをも事実上

消滅させることになった。外務省を通じて教育委員会など他の財源から資金を確保する試みもなされたが、これらもまた不調に終わっている (Gaselee to Wingfield, 25 Oct. 1918)。

英国政府が日本人学生のための教育関連構想への資金拠出に消極的であることが明らかになると、グリーン大使およびそのスタッフは、既存の奨学金プログラムに活路を見出そうと試みた。最も有望視されたのは、セシル・ローズ卿の遺産によって設立され、英連邦外の学生にも門戸が開かれていたローズ奨学金制度である。戦時下においてドイツ人学生向けの割り当てが停止されていたため、これらの枠を日本人学生に転用することは実現可能と見なされた。しかし、事態の進展が遅々として進まないことを憂慮したグリーンは、同年 11 月、ウィングフィールドによる先の議論を追認し、その重要性を改めて強調する書簡を外務省へ送付。その中で、彼は次のように述べている。

英国の学校や大学において、日本人学生の流入を奨励するのに十分な包括的な施設を提供することは賢明な措置であると、私は非常に強く考えている……この戦争中の我々の最良の友人は、英国で教育を受けた日本人であった。したがって、私はこの方向への第一歩としてローズ奨学金を提案するに至った。(I am very strongly of opinion that provision in schools and universities in Great Britain of facilities sufficiently comprehensive to encourage influx of Japanese students would be a wise measure ... Our best friend during this war have been Japanese educated in England. I therefore ventured to suggest Rhodes scholarships as a first step in this direction.) (Greene to Foreign Office, 14 Nov. 1918)

しかし、グリーンの書簡送付からわずか 1 週間後に英国政府から発せられた返電の内容は、極めて明確なものであった。「提案は残念ながら実行不可能である。なぜなら議会は英大英帝国内での割り当てのみを許可しているからである」 (“Suggestion is unfortunately impracticable, as Act of Parliament only allows allocation within British Empire”) (Foreign Office to Greene, 21 Nov. 1918)。こうして、教育イニシアティブを通じて親英的な日本人層を育成しようとした英国側の試みは、ことごとく頓挫する結果となった。

3. 銀杯寄贈の要請

当時、ウィリアム・ヘーグの英国大使館における職位は書記官補に過ぎず、彼の発案による銀杯寄贈というアイデアも、強力な後援がなければ実現は困難であったろう。ヘーグ自身の覚書が示すように、グリーン大使がおそらく彼の主要な後援者であったと考えられる。しかし、ヘーグの構想を推進する上で重要な役割を担った人物がさらに二人存在する。一人は、情報省東京支部の代表者でもあったハロルド・パーレット (Harold Parlett)、もう一人は、外務省と情報省の双方に籍を置く官僚であったスティーブ・ゲイズリー (Stephen Gaselee) である。(パーレットの代表者としての役割については Greene to Gaselee [Ministry of Information], 2 June 1918 参照)。銀杯寄贈に関して英国本国へ送られた最初の公的記録として、以下のパーレット発ゲイズリー宛書簡が挙げられる。

私はサッカー好きの人たちからある提案を受けました。それは情報省がこのスポーツをプロパガンダの一つとして前向きに検討してくれるかもしれない、そうならば、毎年競い合うトロフィーとして（100 円程度の）銀杯を用意してくれるだろうというものです。（I have been approached by certain football enthusiasts with a suggestion that perhaps the Ministry of Information might be willing to regard the game as something in the nature of propaganda ... and to put up a silver cup (costing, say, 100 yen) as a perpetual trophy to be competed for annually.）（Parlett to Gaselee, 17 Oct. 1918）

この書簡から、パーレットおよび彼に助言を与えた人物たちが、外務省ではなく情報省からの支援獲得を企図していたことは明白である。パーレットは、当時東京クラブの主将も務めていたヘーグが作成したメモを同書簡に添付していた（この事実は Greene to Curzon, 28 Mar. 1919 で言及されている）。

1918 年 10 月 17 日付のパーレット書簡が、情報省内で回覧され検討されるまでには、1 ヶ月以上の日数を要している（Ministry of Information “Minute”, 29 Nov. 1918）。後述の通り、この遅延は、トロフィーの運命、ひいては日本のサッカー大会の組織形態に対しても少なからぬ影響を及ぼすことになる。情報省の当該議事録によれば、トロフィー寄贈案に対する反対意見が出された形跡は見られず、ヘーグのメモが、関係者の支持を取り付けるに足る十分な説得力を有していたものと考えられる。

ヘーグのメモは、日本国内におけるサッカーへの関心が年々高まりつつあった状況を詳述する。その結果として、1918 年 2 月には東京高等師範学校において 3 日間にわたる大会が催され、朝日新聞社が後援したことも手伝い、連日報道されるなど大きな社会的注目を集めた。これらの記述は日本側の記録とも符合するが、ヘーグのメモは、これまで知られていなかった英国側の新たな動きを明らかにするとともに、重要な事実を伝えている。すなわち、主として東京高等師範学校の日本人教員たちが英国大使館を訪問し、日本におけるサッカー普及への支援を要請するに至ったのである。これを受け、大会最終日には、主に東京または横浜在住の英国人コミュニティの有志によって構成されていた東京倶楽部がエキシビションマッチに出場した。東京倶楽部と日本人学生選抜チームによるこの試合は、特に皇族の観覧もあって会場は満員の盛況であった。

ヘーグはまた、大会最終日に “the Head of the school” と呼ばれる人物と面談している。大会は東京高等師範学校で行われたのだから、この人物は嘉納治五郎と考えたくもなるが、そうではない。その人物は 1908 年のロンドン・オリンピックに出席した経験があると言及されるからである。同校関係者で同オリンピックへの出席が確認される唯一の人物は永井道明である。彼は現地でサッカーの試合を観戦し、深い感銘を受けていたという。この競技が日本で普及することを確認した永井は、帰国後、サッカーの振興に尽力することになる。彼は日英対訳のルールブックを出版し、日本国内に広く配布するなどの活動も行っていた。その後、永井はヘーグを通じ英国大使館の支援を要請した。この永井との会話に基づき、ヘーグは日本で銀杯を争う形式の大会を創設することが、サッカーを普及させる最良の手段であると確信するに至った。ヘーグはその年の後半に学校関係者と協議を重ね、共同で新たな競技会のための規則を起草している[5]。

しかしながら、ヘーグたちが、銀杯を授与するという具体的な計画について、事前に日本側に伝達したか否かは明確ではない。この不確実性は、前述の内野らが寄贈の報に

驚きをもって接したという事実（内野 1922, 3）に裏付けられる。さらに、日本の学校代表者たちは、それ以前に、英国大使の認証が付された記念メダルを作成を英国大使館に要請していた経緯も存在した。

東京倶楽部は、銀杯を駐日英国大使の手から贈呈することを提案し、大使もこれに同意した。この構想がプロパガンダとしての目的を達成し得ると判断した大使は、カップの製作費用を情報省が負担すべきであると強く主張した（Haigh 1918, “Association Football”）。

4. 銀杯寄贈に関する英国側の準備

ヘーグのメモは、サッカーをプロパガンダの媒体として利用するための土台が、日本ですでに整っていた状況を明らかにしている。その結果、情報省内ではこの構想自体に対する反対意見は見られなかった。しかし、最大の懸案事項は費用負担であった。パーレットによれば、カップの推定費用は約 100 円と、比較的小額ではあったものの、彼は英国政府が駐日英国大使館や現地の英国人コミュニティに対し財政支援を要請する事態を避けるべく、あらかじめ予防策を講じていた（Parlett to Gaselee, 17 Oct. 1918）。

グリーン大使は特に、情報省が費用を負担すべきであると提案していた。ところが、銀杯寄贈のアイデアが英国本国に届く頃には、第一次世界大戦の終結を告げる 1918 年 11 月 11 日の休戦協定調印を受け、情報省は既に組織の清算手続きを開始していたのである。この省は、英国のプロパガンダ活動の効率化と一元管理を目的に設立された時限的組織であり、その歴史的役割を終えた以上、もはや新たなプロジェクトに着手することは不可能となっていた（この状況については Gaselee to Parlett, 10 Dec. 1918 参照）。

パーレットの書簡が 10 月に送られ、その後 11 月下旬に情報省内で回覧される間に、政治情勢は大きく変動していたのである。省内の一部官僚からは、賞杯を贈呈するのは大使自身である以上、その費用も大使個人が負担すべきであるとの意見が出された（Ministry of Information “Minute”, 29 Nov. 1918）。しかし、この提案を大使に直接伝える勇気のある者はいなかった。加えて、第 2 節で既に述べた通り、英国政府自体が長期的なプロパガンダ構想への財政支援には消極的な姿勢を示していたのである。

結果として、出資者の選定は棚上げされたままだったが、その一方で寄贈の準備は進められた。12 月 3 日、FA に対しカップ寄贈の打診がなされた。これはスティーブン・ゲイズリーの個人的な働きかけによるものであり、彼の書簡にも「私は...個人的に FA に話を持ちかけた (“I have...privately gone to Football Association”)」と記されている（Gaselee to Parlett, 10 Dec. 1918）。ゲイズリーは、ペルメル・イースト（現在のキナード・ハウス）に居を構える FA 会長アーサー・キナード卿へ書簡を送り、ヘーグの覚書を同封した。その中でゲイズリーは、銀杯寄贈が日英関係の強化に繋がることを強調し、情報省の解散に伴い代替の資金源確保が不可欠であると説明した。彼はカップの費用を 12 ポンドから 20 ポンドと見積もり、FA の名前をカップに刻むことで、その厚意が広く認識されることを請け合い、巧妙に FA へ資金提供を促し、これを FA 自身の広報機会として位置づけようと試みたのである（Gaselee to Kinnaird, 3 Dec. 1918）。キナードは、12 月 5 日および 9 日付の二通の書簡でゲイズリーに返答した（Kinnaird to Gaselee, 5 Dec. 1918; 9 Dec. 1918）。最初の書簡において、彼は個人的にはこのアイデアを支持すると

表明し、他のメンバーも賛成してくれるに違いないとの期待を述べている。しかし、二通目の書簡では一転して躊躇の色を示し、協会は最近会議を開いたばかりであり、戦時には試合開催数も限られていたため、委員会が頻繁に招集される状況にはないと伝えた。この反応は、最初の書簡に続く FA 内部での協議が、必ずしも全面的な賛同を得られなかったことを示唆しているだろう。

キナードからの二通目の手紙を受け取った翌日の 12 月 10 日、ゲイズリーはパーレットに対し、FA からの正式回答には時間を要する可能性がある旨を書き送った。彼はカップ実現への期待値を抑制しようと努めたのである (Gaselee to Parlett, 10 Dec. 1918)。この状況に慎重な姿勢を強めたパーレットは、10 月の書簡では否定的であった日本国内での代替財源確保の道を探り始め、最終的には愛国協会東京支部長から資金提供の約束を取り付けるに至った (Parlett to Gaselee, 8 Apr. 1919)。

そもそも FA は大英帝国外に銀杯を寄贈したことがなかったし、費用負担も一方的に押し付けられた格好だった。この話は一旦立ち消えたかに見えたが、12 月 24 日になって事態は急展開を見せた。キナードがゲイズリーに対し、銀杯をすでに用意し、刻印および特製のケースを発注していると通知したのである。ただし、クリスマス休暇中であることから若干の遅延が見込まれるとのことであった (Kinnaird to Gaselee, 24 Dec. 1918)。こうして FA がその費用も全面的に引き受ける形となった。カップ自体の費用は、おそらく当初見積もりの 12 ポンドから 20 ポンドの範囲内に収まったと考えられるが、ケースの費用については記録が残っておらず不明である。

トロフィーは翌 1919 年 1 月 2 日にゲイズリーの手元へ届けられた。1 月 3 日付でキナード宛てたゲイズリーの書簡によれば、カップは同日中に東京へ向けて発送される手筈となっていた (この内容は Gaselee to Parlett, 3 Jan. 1919 でパーレットにも伝えられている)。キナードへの書簡に添付されていたヘーグのメモには、「カップは遅くとも一月中に届けてもらいたい」 (“The Cup will be wanted by the beginning of February at the latest”) (Gaselee to Kinnaird, 3 Dec. 1918; Haigh 1918, “Association Football”) との記述があり、キナードもその緊急性を認識していたのだろう。『デイリー・エクスプレス』紙の報道によれば、FA ではこの件に関して緊急会議が招集されたという (The Daily Express “Growth of Soccer in Japan,” 3 Jan. 1919)。

同年 1 月 3 日、この銀杯寄贈のニュースは、『デイリー・テレグラフ』、『デイリー・エクスプレス』、『タイムズ』をはじめとする英国の主要各紙で報じられた。『デイリー・テレグラフ』紙は簡潔な通知に留まったものの、『タイムズ』紙と『デイリー・エクスプレス』紙はより詳細な記事を掲載している。注目すべきは、カップが日本へ発送されたまさにその日に、これらの情報が驚くべき迅速さで公表された点である。これは、当時のメディア界に強い影響力を持つ人物たちの直接的な関与によって可能となった。情報大臣であったビーバーブルック卿は『デイリー・エクスプレス』紙を所有し、日本におけるプロパガンダ雑誌『ザ・ニュー・イースト』を監督するロンドン委員会の議長であったバーナム卿は『デイリー・テレグラフ』紙を支配下においていた (Burnham to Newton (Foreign Office), 19 Oct. 1916)。さらに、『タイムズ』紙のオーナーは、ロイド・ジョージ首相から英国のプロパガンダ活動全般の監督を個人的に委任されていたノースクリフ卿であった。これらの新聞は、政府との繋がりが強く特権的なアクセスを有する体制にあったのである。

ヘーグのメモからは、トロフィーのアイデアが、最初の関東蹴球大会の折に永井と協議したことから生まれたことが示唆される。このことから次の関東大会の勝者にこのカップを贈呈する意図があった可能性は高い。しかし、当時は海上輸送が唯一の現実的な輸送手段であり、休戦協定締結により U ボートによる攻撃の脅威は減少していたものの、輸送遅延は不可避であった。ゲイズリーはパーレットに対しカップ発送を速やかに通知したが、その書簡がパーレットの手元に届いたのは 2 月 12 日であった (Parlett to Gaselee, 12 Feb 1919)。同日、パーレットはゲイズリーに返信し、日本側が英国の貢献に対して適切な謝意を表明するであろうことを請け合った。FA へは英国政府の正式な感謝状の送付も約束されており、これは 1 月 9 日にバルフォア外相のメッセージが外務次官ヴィクター・ウェルズリーを通じてキナードへ伝達されたことで履行されている (Wellesley to Kinnaird, 9 Jan. 1919)。

5. 銀杯の到着

銀杯の日本到着を最初に報じたのは『東京朝日新聞』であった。同紙 1919 年 3 月 12 日付の記事は、以下の通り要約される。

1. FA より壮麗な銀杯が送られ、2 月 26 日に英国大使館へ到着した。その高さは 16 インチ、直径は 7 インチに及ぶ。学校サッカー奨励のため、英国外務省を通じて届けられた。
2. 現在のリーグには多くの外国人選手が所属するため、将来設立される日本蹴球協会の後援のもと、日本人選手専用のリーグが新たに組織される予定である。
3. 徳川家達殿下ならびに英国大使が、蹴球協会の名誉総裁に任命される見込みであり、名誉総裁の手から次回のリーグ戦優勝チームへ銀杯が贈呈される。
4. この大会の詳細は、嘉納治五郎が組織する委員会によって決定される。
5. 銀杯は三越百貨店にて展示公開される。(『東京朝日新聞』1919 年 3 月 12 日)

英国大使館の記録によれば、当時日本の新聞各紙において、この件に関する他の記事は確認されなかった。この銀杯寄贈は今日、日本サッカー史における画期的な出来事として認識されているものの、当時のメディアにおける扱いは極めて限定的であり、特に 2011 年に行われた 2 回目の銀杯レプリカ寄贈時の広範な報道と比較すると、その差は歴然としている。しかしながら、『東京朝日新聞』に加え、『ジャパントाइムズ』紙 (“British Football Association’s Splendid Present to Japan” 3 月 18 日付) をはじめ、『神戸ヘラルド』紙 (“Japan’s Football League” 3 月 20 日付)、『ジャパン・アドバタイザー』紙 (“To Boost Association Football in Japan” 3 月 18 日付)、そして『ジャパン・ガゼット』紙 (“To Encourage Football in Japan” 3 月 17 日付) など、日本の主要な英字新聞はこぞってこの出来事を報じている (Greene to Curzon, 28 Mar. 1919)。この事実は、大正期の日本における日本語メディアと英字メディアとの間に、情報伝達のあり方や報道姿勢

に関して大きな隔たりが存在したことを示唆する。さらに、これらの英字新聞はすべて、嘉納治五郎がカップの受領者として予定されていると報じていた。

銀杯の贈呈式は、同年 3 月 28 日に挙行された。グリーン大使は、この式典の詳細を英国外務省へ報告している。彼の報告によれば、嘉納は先約があったために出席できず、代理人を任命した。この代理人こそ、東京蹴球連盟会長の“Nagai”である（Greene to Curzon, 28 March 1919）。グリーンの報告書中ではフルネームは特定されていないものの、当時の東京蹴球連盟の会長が永井道明であったことから、この“Nagai”が永井道明であるのは間違いない。注目すべきは、まさにこの永井との対話を経て、ヘーグが日本への銀杯贈呈という着想を得た経緯があり、そして永井がカップ受領の大任を果たしたという事実だろう。さらに、永井が受領者として選定されたという事実は、銀杯が日本体育協会ではなく、東京蹴球連盟へ引き渡されたと見ることができる。また、永井が銀杯を受領したという事実は、その後のカップ保管場所に関しても新たな疑問を提起する。銀杯到着後のヘーグのメモ、そしてパーレットの書簡は、この保管場所に関する重要な手がかりを示しており、これらの発見は、銀杯の処遇に関する従来の説の再評価を迫るものと言える。ヘーグのメモには次のような記述がある。

大会（訳註：銀杯争奪戦のこと）は来年に延期され、銀杯は次のシーズンまで英国大使館の金庫で安全に保管されることになった。しかし、その銀杯は閣下が英国に帰国される前、正式に贈呈することができた。（it was decided to let the competition stand over until next year but to have the cup officially presented by His Excellency before his departure for England and then return it to the safe custody of His Majesty's Embassy until next season）（Haigh 1919, “Memorandum”）

ここでは大使館での保管が予定されていることを証言しているに過ぎないが、パーレットの書簡にはさらなる記述が見られる。

（訳註：銀杯は）三越のショーウィンドウ（東京のシュールブレッド）での展示が終わり、大使館に戻ってきた。今は大使館の金庫で保管されており、当分の間、そこに置いておくことになるだろう。（“and now, after, exhibition in the windows of the Mitsukoshi store (Tokyo's Shoolbred), it reposes for the time being in the strong-room of the Embassy Chancery.”）（Parlett to Gaselee, 8 April 1919）

これらの証言は、永井が式典後、銀杯を大使館から持ち帰らなかった事実を裏付けるのに十分だろう。

ところでこの式典は学校の春季休暇と重なり、多くの教員や学生が帰省していた時期に行われている。参加者の少なさはグリーンも言及しているが、日英友好を宣伝する良い機会だったにも関わらずなぜこの時期に強行したのかという疑問をも生じる。大使館が銀杯寄贈の新聞報道に反応して式典をすぐに行ったとは考えにくい。なぜなら、関連写真を含め、この出来事に関する情報を積極的に発信したのは大使館自身であったからである。加えて、銀杯は日本到着後、式典が開催されるまでの間、既に三越百貨店で展示されていた。明らかに、英国大使館はこの贈り物の重要性を広く周知することに積極的であったことが窺える。展示が大きな成功を収めたことは、三越の常務取締役であっ

た朝吹常吉がヘーグに対し二通もの感謝状を送付した事実からも明らかである（Haigh 1919, “Memorandum”）。

では、なぜ贈呈式は、多くの学生が不在となる春季休暇中に举行され、次のトーナメント開催まで延期されなかったのでしょうか。最も妥当な説明は、グリーン大使が4月5日に英国へ帰国する予定であったという点が挙げられる。もし銀杯が1919年2月までに到着していれば、グリーンは遅滞なく優勝チームへカップを直接贈呈できる可能性があった。ヘーグが主将を務めていた東京クラブは、グリーン大使によるカップ贈呈を強く望んでおり、多くの学生が春季休暇で帰省中であったことを考慮すれば、4月5日までに大会を開催することは現実的ではなかったと考えられる。

第4節で論じたように、ヘーグが銀杯の迅速な到着を熱望していたことは、関東蹴球大会の勝者へこれを授与する意向であったことが強く類推される。このことは『東京朝日新聞』、その他の新聞報道や、1919年の彼自身のメモからも確認できる。つまりヘーグは銀杯争奪戦を全国規模の大会にすることは想定していなかったのである。ヘーグは後に、「すべての試合は東京で行われ、開催期間は1週間以内とする」“all the matches will have to be played off in Tokyo in the space of a week”と大会を規定している（Haigh 1919, “Memorandum”）と東京に限定したのだ。その構想の背景には、当時の日本の交通事情や選手の経済的制約を考慮したものであるが、日本の主催者たちは、より壮大なビジョンを有していた。彼らは銀杯寄贈から2年という短期間のうちに、地方チームが各地域で予選を行い、その勝者が東京での決勝大会に進出するというシステムを導入した。これにより、参加チームの移動負担を最小限に抑えつつ、実質的な全国大会を開催することが可能になったのである。もし銀杯が1919年2月の関東蹴球大会に間に合っていれば、同大会で優勝した日本チームへサプライズとして贈呈されたことであろう。そして、もしこの出来事が比較的小規模なものに留まっていたならば、今日我々が知る天皇杯は設立に至らなかった可能性も否定できない。その場合、日本は英国FAに倣った独自のサッカー統括組織を持つのではなく、ドイツや他のヨーロッパ諸国のような中央集権的な全国スポーツ組織のモデルに倣った可能性も考えられるのである。

結論

本論で明らかにしてきたように、銀杯の寄贈は、第一次世界大戦下における英国の対日プロパガンダ活動が生んだ幸運な副産物であったと言える。これらの活動に深く関与した在日英国人たちは、短期的な宣伝活動を通じて即座の成果を上げることの限界を認識していた。彼らが日本国内に英国式の学校を設立したり、多数の日本人学生を英国へ派遣したりする計画は実現に至らなかったものの、サッカーという媒体を通じて、日本人学生層に対し英国の理念を効果的に浸透させる試みに成功したのである。

銀杯寄贈の実現におけるウィリアム・ヘーグの主導的な働きかけ、そして日本人教師たちへの直接的な指導は、日本版フットボール・アソシエーションの創設に向けて、極めて重要な役割を担った。駐日英国大使グリーン自身もヘーグの顕著な貢献を認め、「プロパガンダ活動の関連任務において、その熱意と粘り強さには最大限の賞賛を贈るべきだと私は思います」（“I think the great credit is due to him [Haigh] for the enthusiasm and perseverance he has shown in a branch of propaganda work”）と報告している（Greene to

Curzon, 28 March 1919)。しかしながら、本研究が光を当てたように、これまで必ずしも十分に評価されてこなかった永井道明の貢献を改めて認識する必要がある。永井はヘーグにカップ寄贈の着想を与えたのみならず、グリーン大使から公式に銀杯を受領し、後年にはヘーグの追悼試合で開会の辞を述べている（井染 1991, 220）。永井、ヘーグ、そして銀杯の間に見られるこれらの密接な関係性は、永井が果たした重要な役割を浮き彫りにするものであり、彼の貢献がより大きな歴史的評価に値することを示唆しているだろう。

ヘーグの職位は書記官補であり、英国政府や FA に対する直接的な影響力は限定的であったものの、彼のアイデアを実現へと導いたのは、グリーン大使の強力な後援と、情報省に対してそのアイデアを具体的に提案したパーレットの存在であった。彼らの支援がなければ、ヘーグの構想が日の目を見たか否かは定かでない。さらに、本研究の分析によれば、当時のメディア報道が示唆していたような外務省による寄贈要請への直接的関与は確認されず、むしろスティーブン・ゲイズリーが個人的に FA 会長キナード卿へ働きかけ、情報省の解体という状況下で、外務省の名義を利用して FA の判断を促したことが明らかとなった。パーレットもまた、プロジェクトの頓挫を避けるために、日本国内での代替財源確保という予防策を講じている。

それでも英国 FA がカップだけでなく、自発的に特製ケースまで迅速に準備し、銀杯寄贈に積極的に応じた事実は、日本のサッカーの進歩に対して極めて大きな役割を果たしたと言えよう。この寄贈は、当初こそ戦時プロパガンダという戦略的意図を内包していたが、そのより深い歴史的意義は、日英間の友好関係の育成にこそあったと見るべきだ。だが、皮肉なことに、JFA 設立後間もなく日英同盟は解消され、ヘーグ自身も 1923 年 9 月の関東大震災で悲劇的な死を遂げた[6]。さらに、第二次世界大戦中には銀杯そのものも失われるに至った。しかし、この銀杯寄贈を直接的な契機として設立された JFA およびその全国トーナメント（天皇杯）は、その後、日本最大級のスポーツ組織および競技大会へと目覚ましい成長を遂げた。この贈り物がもたらした影響は、単にサッカーという一スポーツの振興を遥かに超え、日本における英国のイメージ向上にも貢献し、多くの日本人の間に英国に対する継続的な親近感を育む一助となったのである。銀杯寄贈は、比較的小規模なプロパガンダ活動の一環として始まったものでありながら、この時期の日本における英国の文化的影響を示す、最も成功した事例の一つとして歴史に位置づけられるものである。

注釈

[1] 情報省は、第一次世界大戦中の 1918 年に設立されたプロパガンダ組織であった。それまでウェリントン・ハウスと外務省報道部がそれぞれ独立して行っていたプロパガンダの管理を一元化し、より効率的にすることを目的として設立された。情報省の役割については Sander and Taylor (1982) に詳しい。

[2] この内野の回想は、朝日スポーツの記事として竹内（1991）に転載されている。1924 年発行の同誌に帰属されているが、筆者は原典を確認できていない。

[3] 本論文における英語引用の和訳は、特に断りのない限り筆者による。

[4] 日本外務省は、この時期の日本人大衆の反英・親独感情の高まりを、連合国の戦況悪化に帰した。唯一の効果的な対抗策は戦争に勝利することであると結論づけた (The Foreign Office “Minutes”, 21 Aug. 1916)。この時期の反英キャンペーンの詳細については、Nish (2012), pp. 158–177 参照。

[5] 各チームが他の2チームと対戦し、勝利に2ポイント、引き分けに1ポイントが与えられ、競技終了時に最も多くのポイントを獲得したチームが勝者となるというアイデアであった。銀杯は優勝チームに授与され、毎年チャンピオンチーム間で受け渡されることになっていた。

[6] ヘーグの死後、彼を追悼する動きも見られた。1923年9月に亡くなったヘーグを追悼して、同年12月24日には追悼試合が計画され、大使館の有志が小さな銀杯を用意した。彼らはそれを会場に持参したが、日本側がそれを受け取る準備ができていなかったため、贈呈は延期された。ヘーグ追悼杯と名付けられたこのトーナメントは、1925年3月に開催された。(井染 1991, 220-21)

参考文献

I. 未刊行資料

英国国立公文書館所蔵 (The National Archives, Kew, UK; 以下 TNA)

Burnham to Newton (Foreign Office). 1916年10月19日. FO 395/17 [F 210704]. TNA.

Foreign Office. ‘Minutes’. 1916年8月21日. FO 395/17 [F 164323]. TNA.

Foreign Office to Greene. 1918年11月21日. FO 395/172 [F 242288]. TNA.

Gaselee, Stephen, to Arthur Kinnaird. 1918年12月3日. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Gaselee, Stephen, to Harold Parlett. 1918年12月10日. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Gaselee, Stephen, to Charles Wingfield. 1918年10月1日. FO 395/172 [F 240984]. TNA.

Gaselee, Stephen, to Charles Wingfield. 1918年10月25日. FO 395/172. TNA.

Gowers, Ernest (Foreign Office) to Hubert Montgomery (Foreign Office). 1917年2月8日. FO 395/91 [F 31811]. TNA.

Greene, Sir Conyngham, to Lord Curzon (Foreign Office). 1919年3月28日. FO 395/271 [F 001864]. TNA.

Greene, Sir Conyngham, to Stephen Gaselee. 1918年6月2日. FO 395/169 [F 98626]. TNA.

Greene, Sir Conyngham, to Foreign Office. 1918年11月14日. FO 395/172 [F 242288]. TNA.

Haigh, William. ‘Memorandum’. 1919年. FO 395/271 [F 001864]. TNA.

Haigh, William. ‘Association football’. 1918年. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Ministry of Information. ‘Minute’. 1918年11月29日. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Parlett, Harold, to Stephen Gaselee. 1918年10月17日. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Parlett, Harold, to Stephen Gaselee. 1919年2月12日. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Parlett, Harold, to Stephen Gaselee. 1919年4月8日. FO 395/271 [F 001864]. TNA.

Wellesley, Victor (Foreign Office) to Arthur Kinnaird. 1919年1月9日. FO 395/172 [F 242552]. TNA.

Wingfield, Charles (British Embassy) to Stephen Gaselee. 1918 年 7 月 19 日. FO 395/172 [F 240984]. TNA.

II. 新聞・雑誌記事

The Daily Express. 1919 年 1 月 3 日. 'Growth of soccer in Japan'.

The Japan Advertiser. 1919 年 3 月 18 日. 'To Boost Association Football in Japan'.

The Japan Gazette. 1919 年 3 月 17 日. 'To Encourage Football in Japan'.

The Japan Times. 1919 年 3 月 18 日. 'British Football Association's Splendid Present to Japan'.

The Kobe Herald. 1919 年 3 月 20 日. 'Japan's Football League'.

内野台嶺. 1922. 「協會設立の顛末」. 『會報』 第一号 (大日本蹴球協會機関誌): 3-5.

『東京朝日新聞』. 1919 年 3 月 12 日. 「英国から銀杯を」.

III. 書籍・編纂書内論文

井染道夫. 1991. 「ウィリアム・ヘーグさん」. 竹内至編, 『日本蹴球外史: 協会創立七拾年を祝い』. 私家版.

内野台嶺. 1991. 「(1924 年の記述)」. 竹内至編, 『日本蹴球外史: 協会創立七拾年を祝い』, pp. 217-218. 私家版. (原典は内野台嶺 (1924 頃) 『朝日スポーツ』 掲載記事).

後藤健生. 2002. 『日本サッカー史・代表編: 日本代表の 85 年』. 東京: 日本サッカー協会.

後藤健生. 2007. 『日本サッカー史: 日本代表の 90 年』. 東京: 日本サッカー協会.

後藤健生. 2023. 「伝説の FA シルバーカップ」. 日本サッカー協会編, 『日本サッカー協会百年史』, pp. 46-47. 東京: 日本サッカー協会.

日本サッカー協会 75 年史編集委員会編. 1996. 『財団法人日本サッカー協会 75 年史: ありがとう。そして未来へ』. 東京: 日本サッカー協会.

日本蹴球協会編. 1974. 『日本サッカーのあゆみ』. 東京: 講談社.

Nish, Ian H. (1972) 2012. *Alliance in Decline: A Study of Anglo-Japanese Relations, 1908-23*. London: Bloomsbury Academic.

新田純興. 1987. 「F A 杯の寄贈と協会の設立」. 鈴木武士編, 『天皇杯 65 年史: 全日本サッカー選手権全記録』, pp. 41-47. 東京: 日本蹴球協会.

Sanders, M. L., and Philip M. Taylor. 1982. *British Propaganda during the First World War, 1914-18*. London: Palgrave Macmillan.

鈴木武士編. 1987. 『天皇杯 65 年史: 全日本サッカー選手権全記録』. 東京: 日本蹴球協会.

竹内至. 1991. 『日本蹴球外史: 協会創立七拾年を祝い』. 私家版.